

令和 5 年 6 月 2 日現在

機関番号：32686

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2022

課題番号：21K13447

研究課題名（和文）採用選考時の外見差別に関する社会学的研究

研究課題名（英文）A sociological study on appearance discrimination during employment selection

研究代表者

矢吹 康夫（YABUKI, Yasuo）

立教大学・社会学部・特定課題研究員

研究者番号：40727096

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、外見に基づく差別について、とりわけ差別する側の実態にアプローチした。具体的には、履歴書の顔写真が採用選考の判断にどのように影響しているかを明らかにするために、企業の採用担当者を対象にした履歴書評価実験を行った。調査の結果、能力や適性とはかかわりのない顔写真が、採用選考の判断において影響していることがわかった。そのなかでも特に肥満や茶髪、見た目問題の症状がある応募者がネガティブに評価されていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

外見差別をめぐる国内の運動・研究では十分に明らかにされていなかった差別する側、つまりは採用担当者にアプローチした点が新奇性がある。

また、2021年に履歴書の様式が改定され、性別欄への記入が任意になるなど、運動の成果が実を結びつつある。本研究の成果は、履歴書の顔写真が採用選考の判断に影響していることを示しており、これは、公正な採用選考を行うよう指導する立場にある厚生労働省にさらなる履歴書の改定を求めて働きかけるための根拠になるものであり、差別の解消に向けた社会的な意義は大きい。

研究成果の概要（英文）：This study approached the reality of appearance-based discrimination, especially on the part of those who discriminate. Specifically, we conducted a resume evaluation experiment with corporate recruiters to determine how resume portraits affect employment selection decisions. The survey results showed that facial photos, which have nothing to do with ability or aptitude, are influential in employment selection decisions. Among them, applicants with obesity, brown hair, and visual disfigurement were rated negatively.

研究分野：社会学

キーワード：外見差別 ルッキズム 見た目問題

1. 研究開始当初の背景

日本において、外見に基づく差別(以下、「外見差別」)を社会的な問題として提起する研究・運動は、(1)美醜、(2)規範/逸脱、(3)属性という3つの位相で展開されてきた。

(1)美醜の位相は、フェミニズムによるミス・コンテストや美容広告に対する批判に代表される、文化的に強制された「美の基準」の問題化である。フェミニズムは、異性を評価する権利の不平等・非対称性を指摘し、男性から見た魅力に応じて序列化された女性が、男性が求める「美の基準」に順応するよう負担を強いられていることを批判した。これらの研究には数多くの蓄積があるとともに、近年はルッキズムとして社会的にも注目を集めている。

(2)規範/逸脱の位相は、上記のルッキズム批判と重複する部分も多いが、規範的外見からの逸脱と見なされることで生じる差別である。これらは主に、学校校則や企業の服務規律における服装・頭髪規制など、教育と労働の現場で逸脱へのサンクションが問題化されてきた。

以上の美醜と規範/逸脱の位相は、言わば、外見が「ふつう」の範疇での問題とすることができる。それに対して、(3)属性の位相としてあげるのには、疾患や外傷によって外見が「ふつうではない」ことで受ける差別であり、現在は「見た目問題」と呼ばれて問題の解消が模索されている。さらに、属性を本人の意志では変えることのできないものとするならば、位相(3)は広い射程をもっており、「異形」と見なされる障害者や、「日本人らしくない」外見になる海外ルーツの呼びと、「男らしい/女らしい」外見だと判断されづらい性別移行中のトランスジェンダー当事者なども対象となる。

2. 研究の目的

本課題では、位相横断的に生じる外見差別がいかにかに生じるのかという問いを立てて研究を進めた。その前段として、まず「見た目問題」当事者たちが、自身が受けてきた差別をどのように語るのかを検討した。そして、差別の原因となる社会規範と差別する側の実態を解明することを目的に、採用選考における外見差別に焦点を当てて位相横断的な調査を実施した。

3. 研究の方法

まず、「見た目問題」当事者の語りを検討するために、NPO 法人マイフェイス・マイスタイル (MFMS) が2011年3月～2016年3月まで配信していたユーストリーム番組『ヒロコヴィッチの穴』(全200回)の内容分析を行った。そこででの出演者たちのやりとりをとおして、旧来的な当事者像が相対化されていく過程を検討し、MFMS がどのような当事者像を発信しようとしているのかを明らかにした。

次に、採用選考における外見差別を検討するために、企業の人事担当者を対象とした履歴書評価実験を実施した。具体的には、2022年6月8日～9日、ウェブ調査会社のNTTコムオンラインに登録している企業人事のうち、採用を担当しているモニター818人を対象に、回答者1人につき8枚の履歴書を閲覧させ、その応募者が採用プロセスの次の段階に進める可能性を非常に低い～非常に高いの10段階で評価させた。履歴書は、架空の写真(特徴なし(男女)、メガネ(男女)、茶髪(男女)、肥満(男女)、単純性血管腫(男性のみ)、円形脱毛症(男性のみ)、眼瞼下垂症(女性のみ)、アトピー性皮膚炎(女性のみ))のほか、大学での成績、資格・免許、インターンシップ経験、自己PRの各項目がランダムに出現するように設定した。結果は、マルチレベル分析を用いて分析した。

4. 研究成果

本課題の研究成果は、主に(1)「見た目問題」当事者のアイデンティティ・ポリティクス、(2)採用選考時の外見差別の2点である。

前者では、MFMSによる当事者像の相対化が明らかになった。MFMSに先行したNPO法人ユニークフェイスによる運動では、本質主義的なカテゴリー使用や社会と戦う「強い」当事者像の規範化といったアイデンティティポリティクスの弊害も見られた。現在、その運動を引き継いでいるMFMSは、その弊害を乗り越えようと試みており、それを明らかにするために、MFMSが配信していたユーストリーム番組『ヒロコヴィッチの穴』の内容分析を行った。

出演したゲストのうち何人かは、学校で少しはいじめられたが大したことではない、思春期の悩みは「人並み」なものだ、多くの就活生と同じような苦労はしたが症状を理由に差別されたことはないなどの形で、症状を個人的悲劇とみなすストーリーを否定していった。中には、MFMSという運動体が発信するメディアでは、そうした「苦労話」や「戦う当事者」のストーリーを求められるのではないかと想定して、出演を逡巡したというゲストもいた。症状があることで悩んでいない、むしろ楽しんでいると語るゲストもいれば、セルフヘルプ活動に従事しているゲストは、活動をしているからといって症状を受け入れているわけではないと語ったり、多様な外見を受け入れる社会になればいいと思っはいるが、個人としては「ふつう」の外見になりたいと語った。

以上のように、ゲストとアシスタント、MFMS代表の外川とのやりとりから、外川が保持して

いた運動のモデルストーリーが可視化されていったのである。MFMSの特徴は、「かわいそう」と見なすマスターナラティブに対抗する形でユニークフェイスの運動を継承しつつ、社会と戦う「強い」主体というユニークフェイスが提示したモデルストーリーも相対化していったことである。

後者については、企業の人事担当者と対象とした履歴書評価実験から、履歴書の顔写真が評価に際して影響していることが明らかになった。まず、結果からは、大学の成績（GPA）が高いほど評価が高くなることや、資格・免許はTOEIC700点や英検準1級の語学系のものが特に評価が高いこと、自社や同業他社でのインターンシップ経験が評価されることが示された。

他の変数を統制したうえでの顔写真の効果は、眼瞼下垂症・女性や単純性血管腫・男性は強いネガティブな効果があり、なかでも円形脱毛症・男性は最も低く評価されるなど、「見た目問題」の症状が大きく影響していた。また、ジェンダーに着目すると、茶髪は女性よりも男性のほうが低く評価され、肥満は男女ともに低く評価されがちだが、特に男性よりも女性のほうが強いネガティブ効果があった。

人事担当者は、大学での成績や資格・免許といった能力や適正に関わる項目も評価しているが、能力・適正とは関係のない顔写真も評価に影響していることが明らかになった。顔写真の印象が評価に影響しているということは、そのぶん適正や能力に関わる項目に目を通し、検討する時間が削られているということでもある。これは、応募者にとっての公正な選考の機会を損なっているだけでなく、企業にとっても優秀な人材を面接前の書類選考で落としてしまうデメリットにつながりかねないことである。したがって、能力や適性とは関係のない属性に関わる情報はできるだけ履歴書から取り除いたほうが、応募者にとっても企業にとっても有益だと言えるのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 矢吹康夫	4. 巻 45
2. 論文標題 見た目問題のモデルストーリーから距離をとる当事者たち マイフェイス・マイスタイルの『ヒロコ ヴィッチの穴』を事例として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ソシオロゴス	6. 最初と最後の頁 105-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢吹康夫	4. 巻 6
2. 論文標題 私は何を聞いて/書いてこなかったのか 当事者による調査研究とインターセクショナルリティ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語りの地平 ライフストーリー研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 矢吹康夫
2. 発表標題 ジロジロ見られたくない、けどつい見てしまう、じゃあどうすればいいの？
3. 学会等名 人権社会学の可能性を考える連続シンポジウム(1)（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 矢吹康夫
2. 発表標題 外見なんてどうでもいいところで、外見が問題にされる日本社会：校則による頭髪規制、履歴書の写真、職務質問などなど
3. 学会等名 「顔・身体学」領域公開シンポジウム「LOOKISM ルッキズム」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 矢吹康夫
2. 発表標題 履歴書の顔写真が採用選考の判断に及ぼす影響
3. 学会等名 第27回日本顔学会大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 矢吹康夫
2. 発表標題 外見で差別しているのは誰か 履歴書の顔写真が採用選考の判断に及ぼす影響
3. 学会等名 第95回日本社会学会大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 矢吹康夫	4. 発行年 2023年
2. 出版社 立教大学	5. 総ページ数 10
3. 書名 履歴書の顔写真が採用選考の判断に及ぼす影響 企業人事を対象とした履歴書評価実験の結果概要の報告	

1. 著者名 茂木謙之介・大嶋えり子・小泉勇人編、早川公・古田雄一・山本博・前田菜月・松本知子・三浦麻美・矢吹康夫、ほか83名	4. 発行年 2022年
2. 出版社 雷音学術出版	5. 総ページ数 170
3. 書名 コロナとアカデミア	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------